2020年12月5日　インド大使館　バガヴァッド・ギーター

(事情により協会本部からストリーミング)

・読み：第7章11～20節

　前回はジーヴァン・ムクタ(生きている間に解脱した人)について説明しました。

『バガヴァッド・ギーター』第5章16～26節にジーヴァン・ムクタに関する記述がありますが、それに先立ってジーヴァン・ムクタとは何か、解脱、束縛とは何か、についてお話ししました。それをおさらいするとともに、新しい視点も付け加えて少しお話しします。

ジーヴァン・ムクタは ジーヴァット＋ムクタ であり、二つの言葉が合わさってできています。ジーヴァットは「生きている間」、ムクタは「解脱」を意味します。

解脱のひとつの意味は、輪廻のサイクルから脱却するということです。

しかし「もう生まれ変わりを繰り返さない」というのは、解脱についてどちらかと言えば消極的なイメージです。

皆さんは誰でも「今いる場所から離れたい」、「家族のもとから離れたい」などと思うことはあるはずです。しかし離れてどこに行くか、はっきりしたイメージを持っていますか？

若い人も、女性も、男性も、歳を取り弱って何の楽しみもなくなった老人も、「死にたい」と考える人はいます。ですが、死んだ後どんな状態になるのかよく知りません。

協会発行の『輪廻転生とカルマの法則』にも死後どうなるかについて書かれていますし、ヒンズー教だけでなく多くの宗教で死後の世界について説明されています。

しかしヒンズー教と仏教以外の、キリスト教も含めたセム族系の宗教の聖典には、解脱についてあまり多くの説明はありません。解脱という概念自体が見当たりません。

死にたい人、死にたくない人、天国に行きたい人はいても、解脱したいと言う人はあまり多くありません。

他宗教にも解脱に近い概念が全くないわけではなく、キリスト教の「イエスと共に永遠に住む」、には解脱のアイデアに似た部分があります。

ここで言うイエスと共にいる場所は、「楽しみ、喜びがあり、病気のない場所」という一般的なイメージの天国とは違います。

ヒンズー教の考えでは、善いカルマの結果たとえこのような一般的にイメージされる天国に行けたとしても、そこからまた戻ってこなければなりません。

「イエスと共に住む」天国は、「楽しみ、ご馳走、歌や踊り」の天国に比べると、より高いレベルの天国であるとは言えます。

ヒンズー教のバクタ(信者)も、「神と共に永遠に住む」至福を求めます。

シュリ・ラーマクリシュナの住むドッキネッショルを訪れた人たちは、喜びに満たされました。なぜならラーマクリシュナはサッチダーナンダ(絶対の存在・知恵・至福)の化身であり、そこにはアーナンダ(至福)があったからです。またこれとは別のタイプの信者もいます。

彼らは解脱を求めず、何度生まれ変わってもかまわないと考えますが、ひとつだけ条件があります。**「神のことを一秒たりとも忘れないでいられるなら」**、というのがその条件です。

このタイプの信者は、何度でも生まれ変わって神の化身とこの地上で一緒に過ごしたい、と考えます。

シュリ・クリシュナの降臨に伴って、天国から多くの神々が下生して友人や親しい仲間として地上で彼の周りに集まりました。

クリシュナと一緒に過ごすことで大いに楽しめるので、神々も人間の形で現れたのです。

もちろん生まれることで多くの困難も経験しなければならないのですが、神と一緒にいられることは何物にも代えがたいのです。

神と一緒にいられることに比べれば解脱さえも小さいことだ、と考えるのがこのタイプのバクタです。

ギャーニは解脱のことだけを考えますが、バクタの求めるものは各人各様です。

神話に登場するアハリヤーという女性は、「もし一瞬たりとも神のことを忘れないでいられるなら、たとえ来世で豚の姿に生まれ変わってもかまいません」と祈りました。

肉体を持って生まれれば、病気などの苦しみは避けられませんが、神のことを何時も想い、神と一緒にいられるなら、それらは大した問題ではなくなります。

このようなバクタにとって最も大切なものは、神と一緒にいる喜びです。

さて前回も束縛について、束縛には粗大な束縛と精妙な束縛があると話しましたが、少し整理します。何がアートマンを束縛するのでしょうか？

**➀トリグナ**

『バガヴァッド・ギーター』第14章には、プラクリティの3つのグナである、サットワ、ラジャス、タマスの3性質がどのように魂を束縛するかが書かれています。

**➁６つの敵**(６種類の否定的な感情)

肉欲(カーマ：kama)

怒り(クローダ：krodha)

強欲(ローバ：lobha)

幻惑(モーハ：moha)

自惚れ(マーダ：mada)

嫉妬(マツサーリヤ：matsarya)

これらの性質について我々は皆経験があるので、特に説明の必要はないと思います。

**➂８つの鎖**(アシュタ・パーシャ：Ashta Pasha)

『ラーマクリシュナの福音』やその他の聖典もこの8つの障害について言及しています。

***「目をおおっている布は、いわば背後でねじでしっかりととめられているようなものだ。八つのかせがある。これらは、グルの助けなしにははずすことはできない」***

(『ラーマクリシュナの福音』196頁)

ここでは8つの「かせ(枷)」と訳されていますが、これは束縛のことです。

「かせ」という言葉では、正確なイメージが浮かばないかもしれません。

残念なのは、ベンガル語の原本にも英訳本にも何が8つの束縛なのかが具体的に書かれているのに、日本語訳にはなぜかそれがないことです。

以下に日本語、ベンガル語、英語でそれらを列挙します

**恥**(ラッジャ：laja／shame)

**憎しみ**(グリーナ：ghrina／hatred)

**怖れ**(バヤ：bhaya／fear)

**カースト**(ジャティ：jati／caste)

**家柄**(クーラ：kula／lineage)

**善行**(シーラ：sheela／good conduct)

**悲しみ**(ショーカ：shoka／grief)

**厳しい批判・中傷**(ジュグプサー：jugupsa・ニンダー：ninder／reproach・slander)

これからひとつずつ説明していきますが、これらは必ずしも悪いだけではなく良い面もあります。

たとえば**恥ずかしい**という感覚には、「他人に知られたら恥ずかしいから」という理由で、人が悪い行為をしようという気を削いでしまう力があります。(disincentive)

これは羞恥心の肯定的な側面です。

しかし霊的な観点から考えた場合、この「恥ずかしさ」の問題点は何でしょうか？

たとえば神聖な讃歌を歌う場合、感情をこめて大きな声で歌わなければなりません。

踊りの場合も同じですが、この時恥ずかしがり屋の人はなかなかそれができません。

これが羞恥心の否定的な側面です。

『ラーマクリシュナの福音』の記録者Ｍさんはシャイな性格だったので、信者たちが讃歌を歌いながら踊る輪に入ろうとしませんでした。

これを見たラーマクリシュナは、「踊りなさい！」と叱りました。

この場面での「恥ずかしさ」は束縛です。ケース・バイ・ケースなのです。

シュリ・ラーマクリシュナがドッキネッショルから郷里のカマルプクルに戻っていた時、彼の話を聞こうと近くに住む多くの女性たちが集まりました。

ラーマクリシュナは讃歌を歌いながら、女性たちにも一緒に歌うよう促しました。

女性たちももちろん讃歌を知ってはいましたが、恥ずかしさがあり一緒に歌おうとはせず、ただタクルが歌うのを聴いているだけでした。

その中の一人の女性がラーマクリシュナの求めに応じて歌いました。

彼女の歌は上手いとは言えず、声も甘美ではなく震えていましたが、ラーマクリシュナは彼女の信仰の深さをたいそう褒めました。

他の女性たちも歌を知っていて、よりきれいな声を持っている人もいましたが、恥ずかしいという思いが強く、歌いませんでした。

次は**憎しみ**です。

この感情にさえ肯定的な要素があります。

「私は嘘が嫌いだ」などがそうです。(I hate telling a lie.)

憎しみの場合、否定的な側面についてはほとんどがそうであると言うことができ、枚挙にいとまがありません。

ある人と会うのを避ける ⇒ 嫌いになる ⇒ 大嫌いになる ⇒ その人を憎む、という風にステップ・バイ・ステップでエスカレートしていきます。

霊性にとって全く良いことではありません。

憎しみは心の中の病巣(canker)であり、この障害がある限り霊的な進歩は望めません。人、宗教、国、何に対しても憎しみはよくありません。

「罪を憎んで人を憎まず」という言葉もあるように、罪びとに対してさえ憎しみの感情を持つことはよくありません。聖書の『マグダレナのマリア』の話を思い出してください。

ある人を憎むと、その人の中にいる神が見えなくなります。

神は万人の中に存在します。**神を見ることと憎しみは共存できません。**

本当に神を信じているならすべての人の中に神を見るので、そこから普遍的な愛が生まれるはずです。憎しみは魂を束縛します。

**怖れ**や心配があると心はその対象に向いてしまい、神に集中できなくなります。

心に怖れや憎しみが生じた時は、なぜそうなったかを内省する必要があります。

たとえばテロリストをその宗教で分類するなら、その多くはイスラム教徒です。

しかしイスラム教徒の中にも良い人は多くいるのではありませんか？

すべてのイスラム教徒が悪いとは言えません。

国についても同じです。

インドと中国の間には争いがあります。

多くのインド人は中国人が悪いと考え、多くの中国人もインド人は悪いと考えます。

インド人とパキスタン人についても同様のことが言えます。

どの国にも良い人も悪い人もいて人はどこでも同じなのに、政府間の問題を人間同士の問題と混同しているのです。

インド人、中国人、パキスタン人、日本人、相手がどの国の人間であろうが仲良くしている人は多く、国が違っても結婚している人もいます。

ある人に対して憎しみの感情が生まれたなら、なぜそうなったか内省してください。

どの人間にも欠点と長所があり、100%欠点のみの人間は存在しません。

怖れや心配事についても、その源について内省してください。

「心配していることの90%は実際には起こらない」という言葉があります。

なぜ自分が心配しているのか、深く考えてみてください。

**内省しなければ怖れや不安はなくならず、神には集中できません。**

目的は神に集中することであり、それを妨げる障害をどのように取り除くかを考えなければなりません。

自分が高い**カースト**に属するからと言って、その下のカーストの人を蔑む高慢はよくありません。**家柄**についても同じです。

**善行**は良いはずなのに、なぜそれが束縛になるのでしょうか？

「私は良いことをした」という自惚れが生じるからです。

本来は良いはずのことも、場合によっては束縛となる可能性があります。

**悲しみ**について言うなら、我々は石ではなく感情を持った生身の人間です。

親しい友人や身内が亡くなった時に泣くのは悪いことでしょうか？　そうではありません。

シュリ・ラーマクリシュナが亡くなった時、直弟子や信者たちは皆泣きました。

スワミ・ブラマーナンダジは、単なるニルヴィカルパ・サマーディの経験者という以上の、とても高いレベルの聖者でした。

スワミ・ヴィヴェーカーナンダジが亡くなった時、彼はコルカタにいました。

訃報を受け取ったブラマーナンダジは船でコルカタからベルルにやって来ましたが、船を降りた後歩くこともできませんでした。

他の弟子たちに支えられてスワミジの遺体に対面したブラマーナンダジは、スワミジの遺体をハグして泣きじゃくりました。

前回説明した『バガヴァッド・ギーター』のスティータ・プラッギャー(安定した知性の持ち主)とは正反対の態度に見えませんか？

スティータ・プラッギャーには楽しみも悲しみもない、と説明しました。

スワミジが亡くなった時、スワミ・トゥーリヤーナンダジはアメリカからの帰路の船上にいました。スワミジの逝去を知ったトゥーリヤーナンダジは、スワミジへの贈り物として携えてきた金時計を船から海中に投げ捨てました。

船がコルカタの港に着くと、トゥーリヤーナンダジは迎えに来ていたサラダーナンダジと抱き合い、二人とも大声で泣きました。

ただの悟った人にとどまらない大変高いレベルの聖者二人が、これほど感情を表に出すのを見た周囲の人間は、皆驚きました。

シュリ・ラーマクリシュナでさえ、とても愛していた信者が亡くなった時は3日間泣き続けました。ベッドから離れようとせず、動く気力もありませんでした。

ケシャブ・チャンドラ・センが亡くなった時も、同じように3日間泣きました。

しかしどちらの場合も、3日を過ぎると通常の状態に戻りました。

インドでは偉大な人が亡くなると、国葬をして3日間服喪する習慣があります。

ラーマクリシュナは3日間普通の人以上に泣き悲しみましたが、それが過ぎると何事もなかったように元の状態に戻りました。

ホーリー・マザーは父の孫であるナラをとても愛していましたが、彼がその当時治療法のなかったジフテリアで亡くなったことを聞いて、悲しみに暮れていました。

手伝いの人間が、「マザー、今日はタクル(シュリ・ラーマクリシュナ)へのお供えがまだ済んでいません」と言うのを聞いたマザーは、「そうでしたか！」と言っていつもの状態に戻り、急いでお供えの支度をしました。タクルへのお供えはマザーの役目であり、これが済んでいないと皆が食事を始められなかったのです。

一般の人間は夫や妻や子供が亡くなると長い間それを引きずり、時には一生悲しみ続けます。

それが原因で仕事が手につかなくなり、自分の義務を忘れます。

悲しみ(ショーカ)には、サットワ的なショーカとタマス的なショーカがあります。

**サットワ的なショーカもとても強い悲しみですが、ずっと続くことはありません。**

タマス的なショーカは死ぬまで続き、それは束縛になります。

悲しみに束縛されていては日常の義務もできず、もちろん神に集中することなど不可能です。

人間である以上感情を持っているのは当然ですが、サットワ的な人のショーカとタマス的な人のショーカがどれほど違うかを説明するため、トゥーリヤーナンダジ、シュリ・ラーマクリシュナ、ホーリー・マザーの例を持ち出しました。

他人に対する**辛辣な批判・中傷**はそれを実際に口に出そうが、心の中で思っているだけであろうが同じことです。

ある人について、話がつまらない、服装が好みでない、歩き方が気に食わない、などと心の中で思うことはごく普通にありませんか。

「あの人のここが好き」に比べると、これらは否定的な考え方です。

人の良いところではなく気に入らない部分に目が向いてしまうのは、我々の心の問題です。

心が否定的な色眼鏡を通して他人を見るので、気に入らない部分ばかりがクローズアップされます。

青いグラスをかければすべてが青に、赤いグラスをかければすべてが赤に見えます。

私個人の考えを言えば、相手とは喧嘩になるかもしれませんが、批判は心の中に溜めるよりは口に出したほうがまだましです。

心の中にとどめておくと、否定的な感情は蓄積されてどんどん大きくなっていきます。

それよりは外に解放したほうが良いと私は考えますが、実際にそうするかどうかは皆さんが自分で考えてください。

言いたいのは、**批判的な感情それ自体が良くない**ということです。

この感情は束縛であり、束縛のもとにある心で神のことを集中して考えることはできません。

祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まず兄弟と仲直りをしなさい マタイ5:24

ホーリー・マザーは、「他人の欠点について考え過ぎると、それが考えている当人の欠点になってしまいます」と言っています。とても深い心理学的洞察です。

また他人の良い点を見ようとせず、絶えず欠点ばかり見つけ出そうとしていると、心は否定的な方向に傾きます。

「蜜蜂は花に集い、蠅は汚物に群がる」という言葉もあります。

他人の悪い性質ばかりを探していると、我々は蠅になってしまう可能性があります。

「姿は人間、心は蠅」は理想的な状態ではありません。

さらに批判的な心に平安は訪れません。

ホーリー・マザーの最後のアドバイスは、

**もし平安を望むなら、他人に欠点を探すのではなく、自分自身に欠点を探しなさい**（註1）

でした。

私はイギリスのラーマクリシュナ・ミッション支部に滞在していたことがありましたが、そこでは食事の前に通常のマントラに加えて、このホーリー・マザーの言葉もマントラのように唱えることが習慣になっていました。

とても良い習慣だと思いましたが、ひとつ問題だったのは毎日唱えているとその意味をあまり深く考えず、言葉を機械的に口に出すようになりがちだったことです。

これはマントラ一般についても言える注意点であり、意味を考えずただ声に出しているだけならオウムと同じです。

上記のホーリー・マザーのメッセージには二つのポイントがあります。

ひとつは幸せ(平安)です。

もうひとつは、どうしても欠点を探したいなら**「**他人ではなく自分」の中に探しなさい、という点であり、これはパタンジャリ『ヨーガ・スートラ』の**「プラティパクシャ・バーヴァナ（pratipaksha bhavana：反対の思考を育む）」**(註2)という教えにも通じます。

このマザーのアドバイスに従うなら、大きな変化が生まれます。

自分の欠点を見つめてそれを改善しようとするなら、他人の欠点を探している時間などありませんし、探そうとする気も起こらなくなります。

我々の多くは自分の欠点に対しては目を閉じ、他人の欠点は目を大きく見開き凝視します。

考え方を転換してください。

自分の欠点についてはたとえそれが些細なものであっても、ヒマラヤの山のように大きなものだと受け止めてください。反対に他人の欠点についてはそれがとても重大なものであっても、ゴマ粒ほどの小さなものだとみなしてください。

逆に長所に関しては、自分の長所は過小に、他人の長所は過大に評価してください。

自分と他人の欠点と長所に関して、我々は今勧めたやり方と正反対の評価をします。

批判する心が束縛(パーシャ)だということがわかりましたか？

『コーラン』でムハンマドは人のみならず、山羊、馬、駱駝など自分の動物に対する批判も戒めています。すべての宗教が同じことを言っています。

**ホーリー・マザーの最後の教え「誰も他人ではありません」(No one is a stranger)はヴェーダーンタのエッセンスです。**

すべてのものの中にブラフマンがあり、すべては神です。

誰ひとり他人ではなく、皆仲間です。

次のような歌があります。*(マハラジが歌う)*

私の母はパールヴァティ(ドゥルガー)　私の父はシヴァ　神の信者は皆私の友であり　この世界と天国そしてその中間の場所はすべて私の国である

とても美しいアイデアです。

もしホーリー・マザーの言葉を本当に実践できるなら、ヴェーダーンタの勉強も聖典の勉強も要りません。

人に対する奉仕はすべての人の中にいる神に対する奉仕だ、という考え方も同じことです。

さて、ここまで解脱を妨げる束縛について、3つの考え方を紹介して説明しました。

**➀トリグナ　➁6つの敵　　➂8つの鎖**

これらの束縛が全部取り除かれれば、解脱が可能です。

今のテーマはジーヴァン・ムクタですが、悟りの後も肉体を維持していることはとてもまれであり、通常ムクティ(解脱)は死後に得られるものだと考えられています。

ただし、実際に死の直前の解脱もあります。

ホーリー・マザーのイニシエーションのマントラの中に、**「あなたがあの世に旅立つとき、シュリ・ラーマクリシュナがあなたの前に現れます」**という言葉があります。

ラーマクリシュナの出現は解脱と同じことであり、ラーマクリシュナの恩寵ですべての束縛は解き放たれるのです。

『バガヴァッド・ギーター』にも、シュリ・クリシュナのもとへと避難する人は解放されると書かれています。

***世の人々が、これら三性質から成る私の幻象に、惑わされずにいることは非常に難しい。だが私にすべてを委ねて帰依する人は、容易とその危険を乗り越えられるであろう。***

***//7-14***

ラーマクリシュナやイエスのような方が目の前に現れるということは、その霊的な影響力ですべての束縛が消え失せることを意味します。

千年の間ドアも窓も閉じられていた部屋があったとしましょう。

もし窓が開けられれば、千年続いた暗闇も一瞬で明るくなります。

我々のカルマの結果である粗大な、精妙な、原因的な(causal)束縛がどれほど強固であろうとも、千年の暗黒が一瞬で明るくなるという今のたとえのように、ラーマクリシュナの霊的な力によってその束縛は一瞬で消滅する、ということをイメージしてください。

ドッキネッショル寺院の掃除人にロシックという名の男がいました。

彼は掃除人のカーストに属していて、トイレなども含めて掃除することが仕事でした。

おそらく彼は前世では非常に高いレベルの信者だったはずですが、現生でのカーストはとても低く、ブラーミン(僧侶)に触れることもできませんでした。

彼に触れられたブラーミンは沐浴せねばならず、足に触れてプラナムすることさえできませんでした。

深い信仰心を持っていたロシックは、コルカタなどから多くの人たちがラーマクリシュナのもとを訪れ、喜びに満たされて帰っていくのを見て、とても羨ましく感じていました。

師のすぐそばにいながら、触れることも話をすることもできない自分は、いったいどんな罪を犯したのだろう、と悲しみました。

他の人のいる前でロシックがラーマクリシュナと言葉を交わすことなど考えられなかったので、ラーマクリシュナが一人で寺院の隣にあるパンチャヴァティの森に入ったところを見計らい、彼はラーマクリシュナの前に身を投げ出しひれ伏して(五体投地)プラナムしました。

ロシックのこのプラナムは、からだも心も含め自分のものは何ひとつなく、すべてをラーマクリシュナに捧げ、ラーマクリシュナを最後の避難所とすることを意味します。

その状態で彼は、「師よ！私はこれからどうなるのでしょうか？」と尋ねました。

ロシックのこの問いを聞いたシュリ・ラーマクリシュナは、すぐにサマーディに入りました。

しばらくしてラーマクリシュナは、「ロシックよ、将来の心配は要りません。あなたは解脱できます」と答えました。

ラーマクリシュナはロシックに対し瞑想もジャパも命じはせず、彼の仕事である毎日の掃除だけは続けるよう言い残しました。

ロシックはラーマクリシュナの死後も体力のある間は毎日ドッキネッショルに来て、仕事を続けていましたが、彼も徐々に老いてゆき歩くこともままならず、家に籠って神の名を唱える毎日が続くようになりました。

ロシックは天に召される直前ラーマクリシュナのヴィジョンを見ました。

その時彼は、「父よ！父よ！私のことを忘れていなかったのですね！」と言って息を引き取りました。これが死の直前に解脱した例です。

カリパダ・ゴーシュはギリシュ・チャンドラ・ゴーシュの友人であり、彼の紹介でシュリ・ラーマクリシュナの弟子になりました。

後にその悪癖は収まりましたが、もともとは大酒飲みでした。

ある時カリパダ・ゴーシュはラーマクリシュナに舟遊びに付き合ってくれと頼み、ラーマクリシュナもそれに応じました。

船がガンジス河の真ん中に差し掛かった時、突然カリパダ・ゴーシュは両手で師の足にしがみつきました。

ラーマクリシュナが「何をするのか！」と驚くと、カリパダは「私に約束してください」と言いました。

ラーマクリシュナはカリパダに対し、「もし死後の解脱が欲しいならそれは保証する」と言いましたが、カリパダはそれでは満足せず、こう言いました。

「私がこの世を去る時、私は周りに漆黒の暗闇を見て恐怖でいっぱいになるでしょう。あなたは片方の手にランタンを持ち、もう一方の手で私を導いてください。そうすれば、私はいつもあなたと一緒にいられるでしょう」

ここで「導いてください」と言う意味は、ひとつは死の直前の暗闇では目が見えずどこに行くべきかがわからないこと、もうひとつはカリパダが死後に行きたいのは「ラーマクリシュナの場所」であるということです。

舟遊びに来たつもりがこのような要求をされたラーマクリシュナは当惑しましたが、応じなければ帰れないのでカリパダの願いを聞き入れました。

カリパダ・ゴーシュの臨終の時、彼は目の前の誰かに手を差し伸べるかのように腕を伸ばし、息を引き取りました。周囲の人間には見えませんでしたが、シュリ・ラーマクリシュナが約束を果たしにカリパダのもとを訪れ、彼の手を取ったのだと思われます。

これも死の直前の解脱についての描写です。

スワミ・ニキラーナンダジは、ある時師のシヴァナンダジに尋ねました。

「真の知識を得られなければ解脱はできません。そして欲望のある限り真の知識は得られません。いっぽう我々は大小さまざまな欲望を持っています。そうすると我々はたとえ僧侶になったとしても、解脱できないのでしょうか？」

シヴァナンダジは、「もし死の直前シュリ・ラーマクリシュナが現れてあなたに、『来世に生まれ変わってでも実現させたい願いはありますか？』と尋ねたら、あなたは何と答えますか？」と聞きました。

しばらく考えた後ニキラーナンダジが、「生まれ変わることまでして叶えたい願いはありません」と答えると、シヴァナンダジは「あなたは絶対に解脱できます」と言いました。

些末な欲望が残っていても気にはせず、シュリ・ラーマクリシュナに任せればよいのです。

これらが死の直前の解脱です。

死後の解脱については、『ラーマクリシュナの生涯』の中にラーマクリシュナによる描写が残されています。

ベナレスで死ぬと、善人、悪人、聖者、罪びと、誰であろうと関係なくすべての人が解脱できると言われています。

ラーマクリシュナもホーリー・マザーも何度もこのことを言っています。

ある時信者の一人がホーリー・マザーに対して、「霊的な実践を積んだ人でも他の場所で死んだ場合は解脱できるとは限らず、たとえ罪びとでも死んだ場所がベナレスなら解脱できるというのは非論理的ではありませんか？」と疑問を呈しましたが、マザーは「タクルがそうおっしゃるので私もそれを信じています」と答えました。

スカンダ・プラーナ(Skanda Purana)聖典の中のカシ・カンダ(Kashi Khanda)にも、**「ベナレスで人が死ぬと、シヴァ神がその人のためにターラカ・ブラフマ(Taraka Brahma)マントラを唱え、それによって死者が解脱できる」**ということまでは書かれています。

しかしながらそれ以上の詳しいことは、分かっていませんでした。

シュリ・ラーマクリシュナは巡礼でベナレスを訪れた事がありましたが、そこの火葬場で彼が見たヴィジョンについての記述があります。

ある日モトゥルが師をその船旅にお連れした。ヴァーラーナシー最大の火葬場はマーニカルニカー近くにある。モトゥルの舟がマーニカルニカー・ガートに近づくと、火葬場の空気は薪の上で荼毘に付される多くの遺体が放つ煙でいっぱいだった。この光景に師は恍惚の表情を浮かべられ、全身の毛は逆立った。屋根の外に出ると、舟のへさきまで歩いて行ってサマーディに入られた。モトゥルの案内人や船頭たちは師が水に落ちないよう、駆け寄って捕まえようとした。しかしその必要はなかった。師は穏やかに不動の姿勢で、素晴らしい微笑みを浮かべて佇まれた。あたり一面が静まって、神聖な気配が漂った。モトゥルとフリドエが安全のために傍らに立ったが、師には触れなかった。船頭達は驚いてこの尋常ならぬ人物を見つめた。しばらくして師の法悦状態が終わると、皆でマーニカルニカー・ガートに降りて沐浴した。祭儀を行ってから舟に戻り、巡礼を続けた。

その後で、師はモトゥル達にヴィジョンについてお聞かせになった。「色白で黄褐色のもつれ髪をした背の高い人が、火葬用の薪を順番に巡り歩いていた。そして一人一人の魂を死体から注意深く引き上げては、その耳にブラフマンの特別な名前を唱えて、魂を解脱させているのを見たのだよ。薪の反対側にすわっておられた全能の聖母カーリーは、それぞれの魂が作ってきた粗大体、微細体そして原因体における束縛の結び目を解いて、解脱の門を開き、魂を絶対者へと送り届けておられた。主ヴィシュナワートは、不二一元の体験という無限の至福を瞬時にしてお与えになっていた。この至福は長年の集中と修行の後にしか得られないものなのだ」

モトゥルと一緒にいたパンディット達は聖典の知識からこのヴィジョンを裏付けた。彼らは師に申し上げた。「『カーシーカーンダ』には、ヴァーラーナシーで死んだ人にはシヴァがニルヴァーナを授ける、とありますが、どのように為されるのか明言されていません。それをあなたのヴィジョンがすっかり明らかにしてくれます。あなたのヴィジョンと体験は、聖典に記録されている内容を凌ぐものです」*『ラーマクリシュナの生涯』下巻150頁*

翻訳では「ブラフマンの特別な名前」となっていますが、正しくは「ターラカ・ブラフマ」と書かれるべきであり、この箇所は修正の必要があると思います。

英訳本には二つのバージョンがありますが、どちらも固有名詞の「ターラカ・ブラフマ」は使っておらず、英訳を翻訳した日本語版でも抽象的な書き方をしています。

やはり具体的にベンガル語原本にある、**「ターラカ・ブラフマ」**と書くべきだと思います。

これが死後の解脱についての描写です。

燃やされる前の遺体にはまだ魂が残っていて、その魂は束縛されたままなのです。

ベナレスはシヴァの町です。ターラカは解脱という意味であり、ターラカ・ブラフマはシヴァ神があるマントラを死者の耳元で囁くことで、その人は解脱した後**ブラフマンとひとつになる**ことを表しています。何と唱えるのでしょうか？　「ラーマ」です。

**ターラカ・ブラフマ・マントラとはラーマの名前を唱えることです。**

ラーマはシヴァのグルであり、面白いことにシヴァがラーマのグルでもあります。

シヴァが自分で選んだ神はラーマ神であり、ラーマはヴィシュヌと同じです。

その時マザー・カーリーは粗大・精妙・原因体で作られた束縛をほどいています。

シヴァとカーリーによって、ベナレスで死んだ人は解脱できるのです。

霊的実践を重ねた聖者がやっと到達できるサマーディと同じ状態になれるのです。

聖典にも僅かに記述はあったのですが、詳しくは分かりませんでした。

学者たちはシュリ・ラーマクリシュナの証言が具体的かつ詳細であったのに驚きました。

Ｑ＆Ａ

参加者：

「神様のことを一秒たりとも忘れない」ための方法はありますか？

マハラジ：

急には難しいので、まずは毎朝起きてから朝食までの間、他のスケジュール、家族のことなど考えずに神のことを一秒も忘れないようトライしてみてください。実際は何度も忘れるはずですが、まずはそこから始めてください。

参加者：

私も「神様のことを一秒たりとも忘れない」状態でいたいのですが、家を一歩出ると「寒い」と感じてすぐ神様から離れてしまいます。努力しようと思います。

マハラジ：

「寒い」と感じたなら、その寒さも神だと考えてください。心に湧き上がってくるすべての想いの中にも神がいます。瞑想中に雑念が起こればそれも神です。仕事のことを思い出したらそれも神だと考え、また神に戻ってください。

参加者：

私はベナレスに行ったことがありますが、ベナレスのどこで死ねば解脱できるのですか？

ベナレス以外で死んでも、ベナレスで火葬されたなら解脱できるのですか？

*(よく聞き取れず)*

マハラジ：

巡礼の場所はたくさんありますがベナレスは特別で、ベナレスで死ぬと解脱できます。

**註1）**

I tell you one thing:

If you want peace, do not find fault with others.

Rather learn to see your own faults.

Learn to make the world your own.

No one is a stranger, my child;

The whole world is your own.

—Holy Mother Sri Sarada Devi.

ひとつだけ言っておきます。

平安を望むなら、他人の欠点を探さないでください。

むしろ、自分の欠点を見抜くことを学んでください。

世界を自分のものにすることを学ぶのです。

我が子よ、誰も他人ではありません。

世界はあなたのものです。

**註2）**

Sutra 2.33: vitarka-bādhane pratipakṣa-bhāvanam

When disturbed by negative thoughts, opposite [positive] ones should be thought of. This is pratipaksha bhavana (Swami Satchidananda translation).

When doubt or wayward thoughts disturb the cultivation of the yamas and niyamas, generate the opposite: a counterforce of thoughts, images, or feelings that have the power to uplift, invigorate, inspire, and steady the mind. This is pratipaksha bhavana (Rev. Jaganath translation).

否定的な考えに邪魔されているときは、反対の[肯定的な]考えを持つべきです。これがプラティパクシャ・バヴァナです。（スワミ・サチダナンダ訳）

疑念や行き過ぎた思考がヤマとニヤマの修行を妨げるときは、反対の力を生成します：思考、イメージ、または感情の反力は、心を高揚させ、活性化して、鼓舞し、安定させる力を持っています。これはプラティパクシャ・バヴァナです。（Rev. Jaganath翻訳）